

19 世紀中葉のドイツでは、「教会音楽」をテーマにした音楽論が多く書かれていたが、人々が教会から解き放たれていく時代になぜ教会音楽論が隆盛を見たのか。そして教会音楽を語ることにどのような意味があったのか。本研究ではこの時代とくに広く読まれていた論考、すなわち、F・ブレンデル、F・P・ラウレンツィン、L・A・ツェルナー、L・ノールといった、リストとヴァーグナーの音楽に新たな可能性を見ていた（いわゆる「新ドイツ派」を支持する）理論家たちの教会音楽論を主に俎上に載せ、この問題を考察する。

彼らにとって「真の教会音楽」とは、神と人との「和解」が実現される、キリスト教の「ドラマ」であった。彼らはヘーゲル哲学に依拠し、教会音楽が歴史的な発展のなかで真の「和解」の実現へ進んでいくと考えていた。そしてそれがどのように音楽のなかで成立するのかについては、例えば声楽と器楽との「和解」、あるいは作曲家と社会との「和解」といった考え方をすることで、音楽のなかにキリスト教的な「和解」の特徴を見出していた。E・T・A・ホフマンや A・F・J・ティボーが、「真の教会音楽」はもう現代には作られないだろうと悲観していたのに対し、世紀半ばのブレンデルらは、新時代の教会音楽としてベートーヴェンとリストのミサ曲を高く評価し、そのなかに「ドラマ」を見出したのである。

また、当時大きな影響力を持っていたチェチャーリア主義者たちはベートーヴェンなどのミサ曲を徹底的に批判していたが、そのような教会音楽復興運動が音楽を教会制度への適合性から評価していたのに対し、ブレンデルらはむしろ教会音楽それ自体がキリスト教をどのように実現しているのかを問題にしていたのである。

「新ドイツ派」周辺の教会音楽論は従来の音楽研究ではあまり顧みられてこなかったものであるが、彼らにとっては教会音楽こそ音楽論の中心に置かれるべき重要なテーマの一つであった。そもそもミサにおいては神と人との「和解」が前提となるものであるが、敢えてその「和解」を論じていることから、啓蒙的合理主義によって分断された精神（神と人間）の再統合を音楽が「ドラマ」として実現するというところに、彼らが希望を寄せていたことがうかがえる。それは、彼らがヴァーグナーの「ドラマ」と同じほどに、新時代の教会音楽に芸術の未来を見ていたということでもある。本研究では彼らの論考を精読し、また、ホフマンやティボー、チェチャーリア主義者の教会音楽論にも目配りしながら、彼らが解決しようとしていた問題を浮き彫りにする。

20 世紀以降は教会音楽でさえも自律的な「芸術作品」として扱われることが主流になるが、本研究ではもう一度 19 世紀に立ち返り、音楽と宗教との交叉を深く思考した彼らの理論に注目することで、教会音楽を論じることの可能性を再検討することを目指したい。